

調査研究を振り返って

調査研究スタッフ 堀切 ときみよ

元来マンガは好きなので、マンガ雑誌を読むことは苦にならない。ファッション系の雑誌も、いまのティーンエイジャーの様子がわかる、という意味では楽しく読めた。

マンガ雑誌などは、自分もかつて愛読していたものが、タイトルは同じでも内容は様変わりしている（「小学六年生」や「少女コミック」など）ふうんと思うたり、少年マンガ誌でもあまりいわゆる「劇画」調ではなく、女の子にも抵抗なくなっていることが伺えて（「少年サンデー」など）へえと思うったり、アダルトコミックのエグさにううっ、だったり、貴重な経験ができたのだった。

つて求められることの違いや、恋愛観の差異がはつきり見えてきた。ほとんど「恋愛」がテーマで、好きな相手と「両思い」になることが至上価値のような少女マンガ、そのためにはこんなメークをして、これこれのファッション、かくかくしかじかのアイテムで魅力アップを図るべしとのメッセージに満ちた、カタログのような情報誌。ちなみにソレはここに行けば手に入るよ、と経済に組み込むことも抜かりはない。一方で少年マンガは「戦い」や「冒険」が主要なテーマであり、そこで勝ち抜いていくことよって、恋愛の成就や自身の成長や成功を得られる仕組みになっているものが多く見受けられる。

にも、ヒロインたちは瞳に星ちりばめて恋していた。しかし、今のマンガの多くは恋が性行為に直結し、不自然な力関係をも恋愛と錯覚させる表現に満ちていることはきちんとみておかなければならない。少年マンガでは、胸や尻を強調した女性キャラがストリーとは関係なく裸やセクシーな表情をさらしてみせる。「戦い」の過程で得られるモノ化された女性の身体と、少女マンガによる「支配を受け入れる」ことが恋愛であるかのような表現は、子どもたちのなかに性暴力を無意識のうちに植え付けることにはなりはしないか。

性描写のゲームやマンガの影響とは断定できないが、今やそれらのメディアと無縁の生活はほぼ不可能である以上、ことは単純な「規制」か、何でもありの「放置」かですむ話ではない。消費者である子どもたち以前に、大人社会のありようが問われていると感じずにはいられない。大人そのものが、何が豊かな関係か考えず、性や恋愛を語ってこなかった。自身のリテラシー力を高めることや、人としての関係のありようを深く考え、誠実に正直に子どもたちと語り合うことが必要ではないか。今回のプロジェクトで、現役高校生たちと語り合つて得た実感である。

彼女たちが、「歳は違っても、大人とも案外共感できる」という感想をよせてくれたことがとても嬉しかった。

遠回りでも、教育の場でメディアとの付き合い方を学ぶこと、正しい知識を人権尊重の意識とともに根付かせること、そうした努力がいま求められているのではないだろうか。

眠っている子どもなんか、もはやいないのだから。